スポーツ用語の変遷

―陸上競技を中心に―

清　水　泰　生

１．はじめに

スポーツの用語は、時代によって変わることがある。たとえば、サッカーのサドンデスがＶゴールと語を変えたりするなどがその例である。本発表で陸上競技を中心にスポーツ用語がどのように変わったのか、変わった背景に何があったのか。また、その新用語が、別のスポーツの用語にどう影響を及ぼしたのか、また、旧用語との関係はどうなのかなどについて考えてみたい。（＊１）

２．考察の狙い・方法など

陸上競技（＊２）等のルールブック、ＴＶ、新聞、体育の教科書、スポーツ専門雑誌等の用例等を基にして、陸上競技の用語等がどう変っていったのかなどを考えた。その際に、スポーツ史、スポーツ社会学の研究もふまえて、用語の変化の背景に何があったのかについても見て行った。

３．結果

A．日本陸連の競技規定が変わった結果、用語が変わった例

①「コース」から「レーン」へ

日本陸連は、１９９４年競技規則改正で「コース」を「レーン」にした。現在、新聞、テレビでは、「レーン」で表される。

（１）トーレンスの失格は、カーブで内側のラインを踏んだため。競技規則１４１条では「レーン（コース）で行うすべてのレースでは、各競技者はスタートからフィニッシュまで、自分に割り当てられたレーンを走らねばならない」としており、競技者がコース外に出たときは、その競技者を失格させることになっている。１６１条では「右側のラインが各レーンの幅に含まれる」と規定され、内側のラインは他の選手のコース。しかし、実質的に利益がなく、他の競技者を妨害しなかったことを条件に、直走路（直線）でコース外に出た場合と、曲走路（カーブ）で外側に出た場合は失格とはならない。（佐賀新聞 1995 年 8 月 12 日）

（２）八月の全国中学校体育大会で、原俊一（城東中三年）が陸上男子四百㍍を制し、

日本一に輝いた。準決勝を 50 秒 61 のトップで通過した原は、決勝は７レーンからのスタート。（佐賀新聞 1999 年６月 17 日 ）

なお、世界陸上大阪大会のＴＶでは、「セパレートレーン」、「オープンレーン」と言っていたが、『改定新版　朝日新聞の用語の手引き』（２００７年１１月刊行）では「セパレートコース」であった。

（３）さあ、オープンレーン、先頭に立ったのはカナダのリード（世界陸上大阪大会男子８００メートル決勝 TBS 実況中継）

他のスポーツはどうであろうか。水泳は「コース」、ボートは「レーン」である。

（４）50m プールにおける 50m 競技を除き、コースナンバーは、スタート側からプールに向かって右端を第 1 コースとする。（（財）日本水泳連盟　平成１８年１月１日以降適用　競泳競技規則）

②「ゼッケン」から「ナンバーカード」へ

日本陸連は、１９９４年競技規則改正で番号布（通称ゼッケン）を「ナンバーカード」にした。現在、テレビは、「ナンバーカード」を使い、新聞は、「ナンバーカード」「ゼッケン」を混同して使っているが、どちらかと言うと「ゼッケン」が「ナンバーカード」より多く使われる。なお、選手、審判は「ナンバーカード」と「ゼッケン」を混乱して使っている（清水（２００６）より）

（５）ナンバーカード３３７１番があのドイツのピッピです。（アトランタオリンピック女子マラソンＮＨＫ　ＴＶ実況中継）

（６）だが、９１年８月２９日夜、国立競技場のスタンドは、男子四百メートル決勝のスタート前から、早くも異様な雰囲気に包まれていた。５万３０００人の観衆は、「６８５」のゼッケンをつけた７レーンのアスリートの一挙手一投足を見つめた。高野の走りを自分の目にじかに焼き付けたい。（２００３年７月２９日　産経新聞　大阪夕刊　スポーツ面 ）

他のスポーツはどうであろうか。オリエンテーリングは「ナンバーカード」である。走ってタイムを競うという点で陸上競技と似ているからであろう。一方、アルペンスキーは「ビブナンバー」である。アルペンの選手が着ているのはビブスであり、カードではない。

（７）ビブナンバー１番から９９番までいます。（トリノ五輪男子１５キロ距離（ク

ラシカル）ＮＨＫ　ＴＶ実況中継）

なお、デモ、ウオーキング、体育の服装につける布切れは、数（ナンバー）が書いていないので「ナンバーカード」ではなく「ゼッケン」である。

（８）第８回「久留米つつじマーチ」（ＫＯＭＬオフィシャルサプライヤー・日刊スポーツ新聞社後援）の２日目が１７日、久留米市で開催された。（中略）
　高気圧にすっぽりと覆われた九州地方。２日目も久留米の空はさわやかに晴れ渡った。ゼッケンに「天気がよくて最高！　頑張るぞ」と、うれしさいっぱいのメッセージを書き込んでいるウオーカーも。（２００５年４月１８日　日刊スポーツ）

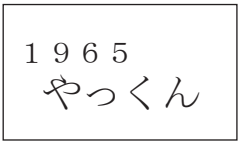
そして、柔道、卓球も「ゼッケン」である。布には数（ナンバー）ではなく氏名が書かれているので「ナンバーカード」ではない。

以上見てみると、これらの布切れは、スポーツ等でさまざまなところで使われ、そして、さまざまな言い方（ナンバーカード、ゼッケン、ビブナンバーなど）をするので今後も、混乱して使われるのであろう。これらの言い方は、「コース」「レーン」よりも言い方のゆれが続くのではなかろうか。それから、最近では、陸上の世界選手権などの国際大会だけでなく、市民マラソン大会でも名前入りのものが見られる。世界選手権などの国際大会では腹部につける布は、数（ナンバー）を書いているのではなくローマ字で名前を、背中につける布にナンバーが書かれているのが多い。（図１）一方、市民マラソンの場合、腹部につける布は、小さいナンバーと大きい名前（あだ名等も含む）のものが多くなってきた（図２）。図２を、「名前入りのゼッケン」（奈良マラソンなど）と言い、一方世界陸上テグ大会のＴＶの実況中継では図１の二枚の布を「ナンバーカード」と呼んでいた。これらの言い方は、今後どうなるのであろうか。興味深い問題である。

図１
世界選手権　　腹部

背中

図２
市民マラソン



③「ゴール」から「フィニッシュ」へ

日本陸連は、１９９４年競技規則改正で「ゴール」を「フィニッシュ」にした。しかし、市民マラソンの開催要綱は、「ゴール」が多い。特に要綱に出ているコース図は「ゴール」が多い。（競技志向が強い大会の場合も同様である）「ゴール」が一般社会に浸透しているので、一般の人が多くエントリーする市民ランナーの大会の場合、「ゴール」を使っているのであろう。そして、コース図の場合、図を見やすくするために文字数の少ない「ゴール」を使うのであろう。一方、新聞の一般紙の場合、（９）（１０）のように「ゴール」と「フィニッシュ」の使い方にかなりゆれが見られる。そして、ＴＶの実況中継は、ロードレースのコースの紹介の場面では「ゴール」を使い、そのほかの場面では、「フィニッシュ」が多く使われている。なお、競技規則改正前の１９９２年バルセロナオリンピックのマラソンの実況中継は「ゴール」、競技規則改正後の１９９６年アトランタオリンピックマラソンの実況中継は、「フィニッシュ」であった。

（９）「僕の方が速かったはず」。ゴールに飛び込んだ瞬間、新庄市立明倫中３年、渡辺光君（15）＝写真＝は思った。１０月２５日、横浜国際総合競技場でのジュニアオリンピック陸上競技（朝日新聞社など後援）男子８００メートルＢクラス決勝で、０．０１秒差で全国優勝をつかみ取った。（２００７年１１月１日　朝日新聞　東京朝刊）

（１０）東京マラソン　１万２０００人の裏方も奔走　給水など「大会支える力に」ビッグサイト　東京ビッグサイトのフィニッシュ地点では、世田谷区の高校２年生大岡拓さん（17）が初めてのボランティアに挑戦した。４２・１９５キロを完走したランナーを「お疲れさまです」と出迎え、毛布を体にかけて控室まで誘導。（2007 年 2 月 19 日読売新聞　東京朝刊 都民版）

さて、他のスポーツは、どうかというと、１９９２年アルベールビルオリンピックのスキー複合の実況中継は「ゴール」と呼び、２００６年トリノオリンピックのスキー複合の実況中継は、「フィニッシュ」であった。アルベールビルオリンピックのスピードスケートの実況中継も「ゴール」であり、トリノオリンピックスピードスケートの実況中継も「フィニッシュ」であった。なお、現在、オリエンテーリング、自転車も陸上と同様「フィニッシュ」である。一方、水泳は、現在も「ゴール」である。

（１１）フィニッシュのタイムは１分１７秒６３（スピードスケート女子１０００m、

トリノオリンピックＮＨＫ　ＴＶ実況中継）

（１２）さあ、ライヒが突っ込んでくる、フィニッシュはどうか、０秒８３（男子回転競技、トリノオリンピックＮＨＫ　ＴＶ実況中継））

（１３）折返しおよびゴールタッチは、両手同時に行わなければならない。（（財）日本水泳連盟　平成１８年１月１日以降適用　競泳競技規則）

④ホップ・ステップ　エンド　ジャンプと三段跳び

三段跳びは、１９２９年までの競技規定では、「ホップ・ステップ　エンド　ジャンプ」という名称であり、１９２９年（Ｓ４）規定改正で三段跳びという名称になった。現在は、「ホップ・ステップ、ジャンプ」は、三段跳びのとぶ様子か（１４）のような比喩表現に使われる。

（１４）東京五輪で銅メダルを獲得したバレーボール男子は、これを踏み台にメキシコ五輪で銀メダル、ミュンヘン五輪では金メダルとホップ・ステップ・ジャンプの三段跳びの活躍をした。この成果も東京五輪という地元開催の“余勢”があったればこそ、というわけだ。（１９８１年10月16日　日本経済新聞　夕刊）

実は、１９１２年以前、三段跳びの飛び方は、いろいろあったが、それ以降は、ホップ・ステップ、ジャンプの飛び方になる。陸上競技の他の種目が、日本語訳になったにもかかわらず、三段跳びだけが、いい日本語訳がなかったので、「ホップ・ステップ・ジャンプ」の英語のままだったが、織田幹雄が１９２７年に「三段跳び」と名づけた。その後、新聞に三段跳びの語が取り上げられた。（岡尾惠市（１９９６）より）

三段跳びと同じような語の変遷を辿ったのはリレーである。（＊３）リレーが始めて正式に導入されたのは大正２（１９１３）年１１月陸軍戸山学校の運動場で行われた「第１回陸上競技大会」であり、そのとき、「リレー・レース」という言葉が使われた。（岡尾（１９９６）より）それが、昭和５年に「継走」（「中継ぎ競走」の意味）と名称変更の規則改正があり、そして、昭和２３年に「リレー」となった。現在は、４００メートルリレーを４継（４００メートル継走）と呼ぶことがあり継走の名前が残っている。（＊４）

B．国際組織が競技規則を変更、それにともない用語が変ったもの

①「オンユアマーク」と「位置について用意」

織田（１９７６）によると、東京大学の明治１６年の運動会のスタート合図は、

「イイカ」「一、二、三」蝙蝠傘を振り下ろす（その後、かさを振り下ろす代わりに「ドラ」の音）だったようである。そして、山本（１９７４）によると第三回極東選手権競技大会（１９１７年）以前は、「仕度して」「用意」か「用意」が使われていたが、第三回極東選手権競技大会で「オン・ユア・マーク」「ゲット・セット」が使われたようだ。その後、日本語か、英語かで論争があったが、その後第５回極東選手権競技大会（１９２１年）で木下東作が、英語を使用、その後、英語に一点張りになったようである。その後１９２８年（昭和３年）にスタートの掛け声の名称を陸上競技連盟が一般に公募し、「位置について、用意、どん！」が採用。翌年、「陸上競技規則」に英語はだめで日本語のみと規定された。(http://movie-max.com/4F6E5F596F75725F4D61726B/#2 参照)

現在、「位置について」「用意」は、４００メートルまでで、４００メートルからの距離は、「位置について」だけである。（１９７５年改正から）国際陸上競技連盟のルール改正のため、２００７年からオリンピック、世界陸上、それに準ずる大会は英語で合図をすることになった。なお、国内の大会は従来どおりであった（＊５)。しかし、２０１０年日本陸上選手権では、８０年ぶりにスタートの掛け声に英語を使った。国際大会に慣れる意味も込めて、国内も英語の「オン・ユア・マーク」「セット」を使ったらどうかという発想である。２０１０年から３年間は移行期間で、英語は日本選手権など日本陸連が指定する大会に限定する。しかし、その後は中高生の都道府県レベルの大会でも全国大会につながるものは新規則に移行する方向であるようだ（＊６)。実際に著者が走った平成２３年度第２回関西学連競技会では、「オン・ユア・マーク」を使い今年（２０１１年）全日本マスターズ陸上選手権大会でも使われた。

ところで、他のスポーツの「スタート」の合図はどうであろうか。以下のとおりである。

・スピードスケート 「Ｇｏ to the start」「Ｒｅａｄｙ」
・アルペン回転「Ｒｅａｄｙ　Ｇｏ」
・その他のアルペン種目「５，４，３，２，１」「ゴー」

一般の人の身近な競走は、学校の体育科教育や運動会や国内の陸上競技の大会なので「位置について」「用意」は、一般の人の記憶に残るが、スケートなどその他のスポーツ種目のスタート合図は、その種目の競技者、その種目のファン以外は、記憶に残らないか、全然聞いたことがないものだと言える。ただ、最近、任天堂のWii Sportsなどのバーチャルスポーツ、デジタルスポーツが盛んになり、

今後、スキーやスケートのバーチャル、デジタルスポーツもののゲームなどが盛んになると、これらの種目のスタートの言葉が広まるかもしれない。

なお、上記にあげたもの以外に国際連盟が用語、ルールを変えた結果、日本語の用語が変ったものの一つにスキージャンプの種目名がある。１９８９年にジャンプ台の呼称が変更、国際スキー連盟では70m級、90m級という呼び方から、Ｋ点を基準とした現在のノーマルヒル、ラージヒルという語になった。しかし日本スキー連盟では、混乱を招くという観点から今まで通り「〇〇m級」という呼称を使った。だが、1年後の1990年、日本スキー連盟もジャンプ台の呼称を変更、日本の新聞、テレビ等でもノーマルヒル、ラージヒルという呼び方が一般化された（http://homepage3.nifty.com/ynag02/jp/jpz.htm参照）

（１５）（１９８９年１２月１６日　ＮＨＫニュース）　ラージヒル

（１６）ＳＴＶ杯国際ジャンプ兼環太平洋カップ　旧７０メートル級で、今季から「ノーマルヒル」と表記。札幌･宮の森。１５日は札幌･大倉山に会場を移し、旧９０メートル級の「ラージヒル」（１９９０年1月７日朝日新聞　東京朝刊）

C．技、用具の変化によって用語が変わったもの

①「正面とび」「ベリーロール」「背面とび」について

走り高跳びの跳び方に大きな変化があった。１９世紀のはじまりに「正面とび」がおこりその後「ロールオーバー」１９３６年ベルリンオリンピックに「ベリーロール」そして、１９６８年メキシコオリンピックに「背面とび」が起こった。メキシコオリンピック後、国際大会の上位に「背面跳び」と「ベリーロール」が混在する。背面跳びはまだまだ未完成で、一方「ベリーロール」は技術的に既に完成されたものであった。１９７６年モントリオールオリンピックにおいてもアッカーマン選手が完成された美しいベリーロールによって金メダリストとなっている。その後、「背面とび」が、科学的によく飛べることが証明され、今では、背面とび以外の飛び方が見られなくなった。（http://www16.plala.or.jp/dousaku/1950nendaisyubi.html参照）しかし、学校教育の現場では、安全面上、小学生の体育の授業では「背面とび」は行わない。中高校の体育の授業も「背面とび」の授業ではほとんど行われていない。行われるのは「正面とび」「ベリーロール」である。だから、「正面とび」「ベリーロール」は、教育用語として残った。

（１７）陸上競技の楽しさについて話すが朝原選手が「ベリーロール」を知らなかったのには驚愕。「高跳びといえば背面跳びだと思ってましたから」。「若い

なあ」というと「そんなんいわれたの何年ぶりかな」で大笑い。「大阪大会を最後の花道にしたい」とか。がんばれ35歳！（http://www.tamakimasayuki.com/nanyara/bn_0706.htm）

上記と同じような他のスポーツに、スキーのジャンプの「V字飛行」があげられる。１９６０年代から「クラシックスタイル」と呼ばれるスキー板をそろえて飛ぶフォームが主流になった。その後８５年にスウェーデンのヤン・ボークレブが、スキー板の前方を大きく開くＶ字を考案し披露。ボークレブは８８～８９年にW杯総合優勝した。揚力が得やすいフォームとして広まり、五輪では92年アルベールビル大会から大半が移行した。ノーマルヒル上位１０人中７人がＶ字飛行だった。今では、ほとんどの選手がＶ字飛行であり、（http://torino2006.nikkansports.com/date/date-011.html参照）実況で「Ｖ字飛行」という言葉がが使われている。

②「シンダー」から「アンツーカー」、そして全天候型（オールウエザー）へ

最初は､トラックは､｢シンダー」で､次に「アンツーカー」が登場した。その後、メキシコオリンピックから全天候型のトラックが登場し、現在、「シンダー」「アンツーカー」の言葉は、言わなくなり、単に「土のグランド」と呼ばれる。

D．社会的背景等による名称、用語の多様化

名称、用語の多様化の一つにマラソンがある。１９０９年大毎主催の阪神間長距離競争にマラソンということばがはじめて使用された。その後マラソンは、１９６７年からエリートランナーだけでなく､一般市民が参加するようになり（以下年表参照）市民マラソン、ハーフマラソン、ウルトラマラソンと用語が増えて行った。

●市民マラソン草創期（年表）

１９６７年　第一回青梅マラソン
１９６８年　水戸マラソンに７１歳の男性エントリー
１９７０年　９月１４日（読売新聞都民版）初の老人スポーツ大会開く
１９７１年　日本高齢走者協会を発足
１９７２年　日本高齢者長距離競走（タートルマラソン）全国大会
１９７５年　ボストンマラソンマラソンツアー
１９７６年　雑誌ランナーズ刊行‥最初は大衆ランナーと呼んでいた。１９７７年から市民ランナーの言葉がランナーズに出てきた。（山中鹿次氏　談）

１９８１年　第一回三浦国際市民マラソン大会（ハーフ以上のマラソン大会で初の市民マラソンと名をうった大会ではないか。大島（２００６）より）

（１８）東京の早春の風物詩、第十六回青梅マラソンが二十一日行われ、高校生から八十七歳のお年寄りまで全国から集まった一万四千人の“市民ランナー”が、梅のつぼみもほころび始めた雨の奥多摩路で健脚を競った。（1982 年 2 月 22 日，日本経済新聞　朝刊）

ハーフマラソンの大会の始まりは山中鹿次氏の話によると１９７５年の福岡県の芦屋ロードレースが公式でわかる初開催のようである。話は変わるが、４２．１９５キロ以上のレースをウルトラマラソンという。日本のウルトラマラソンの正式な最初のレースは私が知る限りでは、１９８６年サロマの１００キロレースである。ただ、（１９）を見れば分かるがサロマの大会開催以前からすでに「ウルトラマラソン」の用語が使われていたようだ。

（１９）欧米で千キロ、二千キロの超長距離を走るウルトラマラソンが流行しているが、中国縦断を試みるランナーが登場した。米ジョージア州タッカーに住むスポーツトレーナー、スタン・カトレル氏（41）で、十九日北京郊外の万里の長城をスタートした。約五十日間で、広州までの二千七百キロを走破する。（1984 年 10 月 20 日　朝日新聞夕刊）

E．その他

国語政策・規則が改定、決定によって、陸上競技の競技規則が改定したことがある。それを紹介すると以下の通りである。

a. １９４０、４１年刊行の規則を文語体から口語体に変えた

b. １９４６年「現代かなづかい」になって、競技規則は、１９４８年新仮名遣いを採用した。

c.『公用文作成の要領』（1951 年 10 月 30 日国語審議会審議決定・1952 年 4 月 4 日内閣官房長官依命通知）では、「執務能率を増進する目的をもって、書類の書き方について（略）なるべく広い範囲にわたって左横書きとする」としている。陸上競技の競技規則も、１９５２年に縦書きから横書き表示へ変った。

d．１９４９年に当用漢字字体表制定された。陸上競技の競技規則も、１９５６年に旧漢字から新漢字に変更した。

e. １９６０年に陸上競技の競技規則は、表記方法を数字は漢字から算用数字へ変えた。（例）　米突→米→m

４．まとめと課題

以上、陸上競技を中心に見てみた。スポーツ用語は技術、用具、ルール、スポーツを取り巻く社会情勢、また、国語政策、スポーツ団体の体質等がスポーツの用語の変遷に大きくかかわってくるといえる。今後、野球、サッカー等も見て行きながら、このことについて深く追求して行きたい。

（＊注）

（＊１）スポーツの言葉の研究は、どのような領域があるのか。（先行研究を調べてみて）大きく分けて三つの研究領域が考えられる。（清水（２００７ａ）より）
その一　スポーツ用語に関する領域
その二　スポーツのメデイア媒体に関する領域
（例）スポーツ実況中継、場内アナウンスのことば
その三　競技者、指導者等のやり取りに関する領域
（例）指示言語、こつをどう言語化するかなど‥（例）山口（２００６）（２００８）
本考察は、その一に関しての研究である。

（＊２）山本（１９７４）によると陸上競技は、正岡子規が命名、「トラック　アンド　フィールド」の言葉は、大正６年、１９１７年　第三回極東大会から使われとようである。

（＊３）米川（１９８６）によると、学校体操教授要目改正（昭和１１年６月３日）で従来の外来スポーツの外来語を漢字表記語にかえて外来語を排除、リレー、レースを「継走」、ホップ・ステップ　エンド　ジャンプを「三段跳び」にしたようである。しかし、もうすでに、昭和４、５年の競技改正で、継走、三段跳び（漢字表記語）になっており、当時の新聞も漢字表記語で扱われている。（日本陸連・新聞と学校教育現場とにずれが見られる）

（＊４）英語の呼び方や略号で言う事がある。以下がそれである。
「走り高び」→ハイジャンプ→ハイジャン
「走り幅跳び」→ロングジャンプ
１１０メートルハードル→トッパー
（なぜか女子の１００メートルハードルの略語がない。）
４００メートルハードル→ヨンパー
１６００メートルリレー→マイルリレー→マイル

３０００メートル障害物競走→サンショウ

（＊５）米川（１９８６）によると池部鈞『凸凹放送局』（１９２９年）の運動すごろくの場面で遊んでいる子どもが「オンユアマークス･ゲツトセツト」を言っており、子ども中にも外来語が入ってきたといっている。しかし、その時すでに日本陸連は「位置について用意」の言い方を採用している。

（＊６）２０１０年６月３日 朝日新聞 東京朝刊参照。
なお、この記事で、スタートのかけ声についていろいろと紹介されている。

(参考文献)

・大島幸男（２００６）『市民マラソンの輝き』岩波新書
・岡尾惠市（１９９６）『陸上競技のルーツをさぐる』文理閣
・織田幹雄（１９７６）『改定新版　陸上競技百年』時事通信社
・紀田順一郎（１９９７）「どよめき渡る歓呼の裡」
『図鑑日本語の近代史　言語文化の光と影』ジャストシステム
・清水泰生（２００６）「スポーツのことば今むかし」
『日本語学』１２月号明治書院
・清水泰生（２００７ａ）「国語辞典におけるスポーツ用語の比喩表現（日常語）について―陸上競技の用語を通じて―」『日本語辞書研究』５港の人
・清水泰生（２００７ｂ）「新しいスポーツ用語と旧スポーツ用語との関係－「ゴール」「フィニッシュ（ライン）」をめぐって－」
『第２０回社会言語科学会大会発表論文集』社会言語科学会大会
・日本陸上競技連盟七十年史編集委員会（１９９５）「競技規則の主な修改正」
『日本陸上競技連盟七十年史』 ベースボールマガジン社
・日本陸上競技連盟編（２００７）『陸上競技ルールブック２００７年版』あい出版
・日本陸上競技連盟編（２００５）『陸上競技審判ハンドブック２００７～２００８年版』あい出版
・米川明彦（１９８６）「近代における外来語とスポーツ－その定着過程－」『論集日本語研究（二）歴史編』明治書院
・山本邦雄（１９７４）『近代陸上競技史』（上、中、下巻）道和書院
・山口政信（２００６）『スポーツに言葉を』遊戯社
・山口政信（２００８）「「わざ」の伝承と創発を喚起するスポーツ教育の創作ことわざ」『明治大学教養論集』４３５